

*「ボレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



菜の花畑に看板出現!!

「一坪キャンペーン」継続中!

ナロジチ地区スターレシャルノ村のはずれ、汚染され荒廃した大地を切り開いてつくられた4ヘクタールの菜の花畑が、実りの「夏」を迎えました。今回、この畑に「一坪キャンペーン」協力者お一人お一人の名前を記した看板が立てられました。プロジェクトをスタートさせて4年目となりましたが、幸い補助金も幾つかいただくことができ、菜の花による土壌浄化実験も軌道にのり、BDF・BG装置などバイオエネルギーのハード部分もほぼ完成しました。これからは、「プロジェクトの成果をいかにナロジチの住民に手渡すか」が重要な課題となります。ところが残念なことに、「多くの住民にとって、このプロジェクトはまだまだ他人事でしかないのだ」という現実には直面しています。それは、資金の多くを助成金に頼ってきたため、やむを得ない面もありますが、日本側で立案した計画通り執行せねばならず、現地の事情を十分に配慮できなかったことも一因となっています。今後、プロジェクトの成果というバトン現地住民にしっかり手渡すために、これまで以上に、彼らの意見を丁寧に汲み上げながら、柔軟に対応することが求められます。そのためには、現地の要望にきめ細かな対応が可能となる、融通の利く資金が不可欠です。一年前、「現地住民による住民のためのプロジェクト」として完成するために、菜の花畑の坪数（1,200坪あまり）をもとに、皆さまから1坪（□）当たり3,000円の支援をいただき、とりあえず1,000坪（□）分を集め、ハードのみならずソフトを伝えるための経費に充てたいと考えて、「一坪キャンペーン」を始めました。現在、目標の1割にようやく達したところです。引き続きのご支援を、よろしくお願いいたします。（小牧）



このナタネ畑は、チェルノブイリの惨禍によって放射能汚染されたナロジチの農地を改善し、農業の復興を願う下記の日本人々の出資によって運営されています。（チェルノブイリ救援・中部）

〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞3-8-10 愛知労働文化センター 地下1階

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部（店番号150）

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人チェルノブイリ救援・中部 理事長 小牧 崇

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-732-7172（月・水・金 10:00～17:00）

ホームページ：<http://www.chemobyl-chubu-jp.org>

事務所引っ越し 大奮闘記

(山本梨恵)

先月末、18年間もお世話になった“楽園アパート”から引っ越しをしました。当日は小雨が降る中、総勢15名、人それぞれの引っ越しファッションに扮した方々に手伝っていただきました。

今までの事務所は、誰が見ても”おっ！お化け屋敷？”と言ってしまうような建物で、お茶請け話によく冗談で、『いつ崩壊してもいいように、あれとこれは持って逃げなきゃ！』と話していたものでした。約6年前にアパート周辺に地下鉄が通るようになり、便利になりました。その結果、周辺は高級住宅街となり、外車がたくさん走り回り“楽園アパート”は、次第に周囲の景観から浮いた存在と



なっていました。

そんな事務所から、18年間の想いとともに引っ越しをしました。引っ越しの前週は総会があり、引っ越しの準備どころではなく、「全ての荷物のパッキングは無理だろう」と誰もが思いましたが、1週間で詰め終えることができました。当日も、「一日じゃ終わらないだろう」と思っていた引っ越しでしたが、多くのボランティアさんのおかげで、全てのものを新しい事務所に運び入れることができました。手伝っていただいたボランティアさんたちは、“永遠

と続くしりとり”ゲームをしながら、約100箱のダンボール(100箱なのは、小さい箱じゃないと持ち運べないため…)やコピー機・木机等を運び出し、運び入れをしてくれました。この場を借りて、当日手伝ってくださった方や応援してくださった方々に、お礼を申し上げたいと思います。

楽園アパートの最後の掃除の際、柱や壁はシロアリによってスカスカになり、4.5畳×2間の部屋の畳は今にも抜けそうなくらい凹み、開設当時の事務所を知らない私でも、「18年の歴史というのは大きいな」と感じる事ができました。

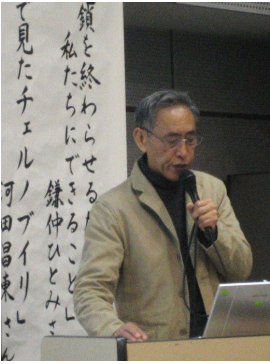
新事務所は、鶴舞公園が近くにあり、煮詰まったときや昼食時など、気分転換に最適な環境になりました。

事務所は、建物の地下1階なのですが、腰の高さから天井まである窓のおかげで、明るく風通しも良く快適な環境となりました。窓には、目隠しシートが神野さんの神業によってキレイに美しく張られました。旧事務所で使っていた棚等、いらぬものは破棄する予定でしたが、それらを河田さんが少しずつ事務所っぽくレイアウトしながら有効利用して、廃棄物が半分以下になりました。来客やボランティアさんがきても、すぐに迎え入れることができる長机が置かれ、インターン生用の事務機とパソコンも設置できました。これから少しずつ改良して、使いやすくたくさんの人に来てもらえる事務所を目指し、新たな地で頑張っていきたいと思います。



会議もできるようになった新事務所。
皆さん、是非遊びに来てくださいね!!

<チェルノブイリ24周年企画・河田さん講演(概要)>



急避難した人が13万5千人いた。汚染地には、今なお450万人もの人々が住んでいる。人口の密集した原発立国日本で事故が起これば、チェルノブイリ以上になることを覚悟しなければならない。

チェルノブイリの放射能被害の7割方は、体内被曝である。事故処理作業者は、体外・体内の二重の被曝を受けた。現在も、汚染地域の人々は放射能とともに暮らしている。放射線が体内を通る時、水やたんぱく質の分子が壊され、高い化学反応性をもつ活性酸素ができて、それが周りの遺伝子を壊していく。その結果、白血病・がんだけでなく、あらゆる病気が増えて老化を促進する。ナロジチに残った1万人ほどの住人のうち、17歳以下の子ども達の病気は今も増加中で、老人が罹患するといわれている糖尿病や脳血管の病気が多い。また、成人のがんも激増中である。

環境に対する影響では、原発近くで採取した植物をレントゲンフィルムにはさんだところ、感光するほど強烈な汚染だったことが分かっている。最近の研究で、ゾーン（30キロ圏内）に生えているシロイヌナズナを調べたところ、突然変異に対する抵抗力を獲得し、変異を起こしにくくなっていることがわかった。研究の結果、遺伝子の組み換え頻度が下がっていることがわかった。異常を起こした遺伝子が、異常を拡大しないようになっている。非汚染地区のシロイヌナズナの損傷DNAの修復能力は弱かった。植物はそのようにして、放射能に対処し生き残っている。

一方、動物についても最近、フランスの研究者らがゾーン内でバンスワロー（ツバメの一種）の奇形を調査している。汚染地のひな鳥の3割が奇形である。きれいな色の鳥ほど奇形が多く、汚染地での生息数が少ない。鳥の体の発色には、カロチノイドのような抗酸化作用のある物質が関係している。汚染地では、放射線による活性酸素の影響で、体内の抗酸化物質が少なくなり、遺伝子が壊れ易く奇形が多くなるという。その結果、小鳥や昆虫は放射能レベルの高いところでは生きられない。また、スイスのイラストレーターがオオカメムシの奇形の分析をし、低い放射能レベルでも、奇形を起こすことが分かった。世界各地の調査の結果、奇形の発症率と風向き（原発方向からの風）との間に相関関係があることが分かった。

進化の過程では、「生物が経験しなかった放射能を人間にばらまかれ、環境汚染でオゾン層を破壊されて大量の紫外線にさらされる」…といった、遺伝子にとって過酷な状況下で、生物は対抗する手段を必至に発揮しているのだ。それでも、様々な奇形や病気が発生してくる。原発は時代遅れだ。ヨーロッパも「原発に逆戻り」というマスコミのキャンペーンは、意図的に展開されている。実際は、既存原発の延命に過ぎない。持続可能エネルギーは増大しており、バイオマスで100パーセントエネルギーを自給しているドイツの村が、実際にある。

（菜の花プロジェクトについても話されましたが、省略します。）山盛



総会&チェル救デーの報告



6月19日、あいち国際プラザにおいて、「2010年度定期総会およびチェル救デー」が開催されました。議長の小牧代表より、昨年度の活動報告・決算報告、そして、今年度の事業計画が報告されました。

チェル救デーでは、戸村さんの外務省研修プログラムによる「ゼムリヤキ（チェルノブイリ被災者団体）での研修」の報告がありました。その報告を聞いて、被災者団体として活発な活動を続けているゼムリヤキから、長期にわたる活動のモチベーションを維持するエッセンスを、

戸村さんが授かってきたように感じました。

ウクライナより帰国直後の宮腰さんの映像は、キリチャンスキーさんやディードゥフさんのインタビューを交えたもので、私達の活動に一石を投じる内容でした。

交流会では、正会員の方たちより、ポレーシェの有料化などについて率直な意見をいただきました。そのお話から、「私達が会員の方たちを選んでいるのではなく、あまたある市民活動の中から「救援・中部」を選んでいただいている」ということを痛感しました。ありがとうございました。（市原）

「仲田銀座夏祭り」に参加しました！

笠寺観音でのフリーマーケットでは、品物が充分集められないまま当日を迎えたという苦い経験から、今回は2ヵ月前に、7月24日午後から行われる夏祭りイベント「仲田銀座夏祭り（フリーマーケット）」への参加を決めました。先日の事務所引っ越しで発見されたお宝や、友人知人へのロコミで出品品を募集したところ、ブースに並べきれないほどのバザーグッズが集まりました。夏休みに入って初めての週末で、茹だるような暑さの中、14時から準備を始めました。ある程度値札を付けてブースに並べてみましたが、近隣のブースに並べられている類似品と比較して急遽値段を変更、「何としてでも売りきらなくては！」と頑張りました。大物が売れていくと感激です。中には小額の品を「お釣りが面倒だから」とまとめ買いする人もいて、なかなか繁盛しました。

子どもがら〜6人でブースの前に集まると、ブースの前はたちまち渋滞です。一気に賑やかになって、お祭りの雰囲気満載でした。しかも、隣のブースからは、揚げ物の香りや焼き鳥の煙が漂ってきます。

客足が増えたのは、そよ風が吹き始めた日暮れ頃からでした。浴衣を着た子ども達が親子でそぞろ歩くのは、なかなか風情があるものです。日本の夏だなあと思いました。

連日、酷暑を告げる天気予報を参考に、水分と塩分の補給を忘れず、酷暑と闘いました。

右は、今回のバザーを頑張ってくくださったボランティアの皆さんです。更に今回の経験を生かし、次回のフリーマーケットに向けて準備開始(?)となるのでしょうか。

酷暑の中、ありがとうございました。(美)



酷暑の中、大活躍のフリマ4人衆（前列新里さん・後列左から、辻下さん・樋口さん・島田さん）

「ナロジチ地区復興 ナタネプロジェクト」に スイスが加わる!!



2009年11月25～26日、ジトーミル国立農業生態学大学の学者たちは、キエフで開かれた、「ウクライナにおける農業生産のエコロジー化に関する国際会議」に参加しました。会議の主催者はウクライナ農業政策省、ドイツの国際有機農業センター「エココネクト」、そして在ウクライナスイス大使館でした。

会議では、「今日の経済危機」「現在と未来の農業の主要な課題」、また「作物の生産性と農産物の品質の向上・バイオエネルギー

源としての高エネルギー作物の栽培・自然環境の保全」という、3つの問題を同時に解決する方策について話し合われました。

「ウクライナ農業におけるオルタナティブ・エネルギー源」という分科会で、日本の市民団体「チェルノブイリ救援・中部」とジトーミル国立農業生態学大学による、「ナロジチ地区復興ナタネプロジェクト」の報告が行われました。プロジェクトの成果は参加者の、とりわけ在ウクライナスイス大使館関係者の関心を集めました。彼らは、プロジェクトの中のバイオ燃料生産部門、特にバイオガス生産への参加に興味を示しました。そこで私たちは、ナロジチ地区ラスキ村のバイオガス製造装置建造と稼働が成功裡に行われるよう活動している「チェルノブイリの人質たち」基金・農業生態学大学・「チェルノブイリ救援・中部」の努力に対し、財政上の援助が行われないものかと、スイス大使館に提出するプロジェクトを準備・申請し、承認されました（総経費 138,830 グリヴナ＝約 17,600 ドル、実施時期は 2010 年 6 月～2011 年 2 月）。ウクライナ政府によるチェルノブイリ問題関連の支出が、経済危機のあおりもあって削減される一方である状況においては、問題解決の可能性を与えてくれるいかなる資金も有効に利用しなければなりません。プロジェクトの参加者は、上記 3 者の他、ラスキ村の住民、そしてラスキ村のカヴェツキー農場です。

プロジェクトの主要な課題は、更新可能なエネルギー源として、また有機肥料製造の原料としてのバイオマスの利用の経験を普及・一般化させるための「バイオガス製造装置の整備（装置を芝生で覆う・原料置場の建設・柵や看板の設置）」、またバイオ燃料の製造と利用を通じて、地域住民の協働を組織していくことです。

この助成金により、プロジェクトのすべての参加者と地域住民の代表者らによる「円卓会議の開催」、チェルノブイリ事故の結果により汚染された地域での農業における省エネルギー技術とオルタナティブ燃料の導入の特性に関する「科学的情報（ブックレット・掲示物・チラシ）の作成」も見込まれています。このようにして、バイオガスの製造・利用の経験を、ナロジチ地区の他の村、あるいはジトーミル州の他の地区に普及させていこうと考えているのです。

私たちは、「チェルノブイリ救援・中部」のメンバーと日本の市民の皆さんが、ナロジチ地区の汚染地域の生活がすみやかに復興するよう、また、国際社会の代表者たちがこの大きな問題に関心を持つよう積極的に活動してくださっていることに対し、深く感謝しています。

ジトーミル国立農業生態学大学 M.ディードゥフ
「チェルノブイリの人質たち」基金 E.ドンチェヴァ

—はじめに—

6月16日から7月17日までの一ヶ月間、ウクライナのナロジチ地区に滞在し、バイオガス追加工事とBDFの製造を行ってきました。結論から言えば、目的のバイオガス加温装置関係の工事は終えたものの、新たに発酵槽のトラブルを発見し、対処中に時間切れ。BDF製造も、後一步のところまで迫りながらも時間切れということになりました。これだけでは何のことやら分からないと思いますので、今回訪問の様子を2回に分け、報告します。

バイオガス製造装置は、ナロジチ地区ラスキ村のコベツキー農場内にあります。昨年5月から7月にかけて、私も含めた日本人スタッフと、現地住人・農大生の共同作業で工事が進められ、装置は完成しました。ガス発生予定量は、日量2立米（一般家庭の一日の使用量）と少ないのですが、菜の花プロジェクトの中での位置付けは、「菜種バイオマスからのガスの取り出し」と「バイオマスに吸着された放射能の取り出し」というものであり、実験規模ながら大事な役割を持つものです。

* ガス発生点火はできたが…

しかし、昨年夏に装置は完成したものの、実際に原料を入れ始めたのは秋になってからで、軌道に乗るまでの期間の原料を「生牛糞」と指定したにもかかわらず、ウクライナ語で「牛糞」と「牛糞堆肥」は同じであったため、誤って「堆肥」が投入されるという間違いがあり、その後メタン菌が活性できにくい冬に入ってしまったため、冬場の原料投入（連続稼働）を諦めなくてはなりませんでした。

そのような事情で、今年の原料投入は気温の上がる5月からとなってしまいました。現地からは、訪問直前に「ガスの発生が見られ点火できた」との報告がありました。昨年冬場に稼働できなかったことを踏まえ、バイオガス発生実験が年間を通してできるように発酵槽の「加温装置」を強化すべく、日本から私、キエフからチェル救駐在員竹内氏が、現地に派遣されました。

ガス発生装置の隣には、ガスの管理をするための貨車が置かれています。この貨車の内部は、断熱のために天井や壁の内側にアスベストが敷設されていました。そこで、使用中のアスベストによる被害を防ぐための改装を、農場に依頼してありました。ところが、到着時点で内装は完了しておらず、完成まで3日程待たされました。

* 加温装置の設置

内装完成後、先ず「加温装置」作りに着手しました。「加温装置」といっても、薪ストーブの上に鍋のような容器を載せて不凍液を入れ、加温された不凍液を発酵槽内の底部分に埋め込まれているパイプにポンプで送り、循環させるという単純なものです。先ず、レンガでストーブの置かれる場所に台を作り、熱の加わる壁側にもレンガ壁を積みました。その後ストーブを置き、貨車の屋根に穴をあけて、煙突を貫通させ、雨が漏らないように養生をしました。



完成した「加温装置」

言葉にすれば簡単ですが、実際には工具や材料の買出しが大変でした。工具や材料を売っている町まではバスで20~30分かかり、農場の車を出してもらえる場合はいいのですが、出してもらえない時は朝9時40分のバスに乗り、オブルチという小都市まで出かけるのです。帰りのバスは夕方までないのでタクシーで戻り、買い物だけで4~5時間かかってしまいます。買いたい品物も一通りは売っているのですが、日



本のように売れても補充されることが少ないので、見つけたら直ぐ買わないと間に合わないということがあります。また買い物は、専門店とバザールで行うこととなりますが、バザールは午後3時過ぎには店じまいしてしまうので、時間によっては買えないときもあります。今回困ったのは、ストーブの「煙突」です。ストーブは手頃な物を見つけ「すかさず」買ったのですが、日本であればストーブの煙突などは、寒い地方ならどの金物屋さんでも売っているのですが、こちらでは天然ガスかペチカによる暖房です。いずれも、煙突の素材はヒューム管（コンクリート）あるいはレンガであるため、ステンレス製の二重煙突はどこにでも売っているというものではありません。一番近い町オブルチにも売っておらず、車で2時間ほどかかる都市ジトーミルで農大のディードフ氏に見つけて買ってきてもらいました。この煙突が見つからなければ、トタン板から自作で煙突を作らなければならないところでした。工具部品類も同じで、結局7回ほどオブルチまで買い物に行くはめになりました。

* 温度が上がらない！

加温装置の取り付けが終わり、3日ほどかけて少しずつ加温したのですが、なぜか温度が上がらないことが判明しました。温度が上がらなければ冬場の実験ができないのですから大変です。「なぜなのか」原因を探るため、本来ならばめったに開けることのない発酵槽の蓋を開けることにしました。農場の人に手伝ってもらい、重たいコンクリートの蓋を開けてみて「ビックリ」。内部の上側・壁面・底など全体に藁の層が張り付き、未発酵の牛糞が固まっていました。この原因は、昨年「牛糞」と「堆肥」を間違えたとき、藁を十分に取り出すことができず、その後も投入時の水分の不足、牛糞とともに「長い敷き藁」も入れてしまったことによるものです。これではガスの発生も少なく、温度も上がらない筈です。

* つらい、原料「牛糞&藁」抜き取り作業

この事態を小手先で直すわけには行かず、結局、発酵槽の内臓物全部を抜き、綺麗に掃除することにしました。水分は、地区の学校汚水を吸い取るバキュームカーを頼み、抜いてもらいました。また「牛糞&藁」等は「すくい上げる」道具がないため、長い角材を鋤簾（じょれん）に取り付け「柄の長い鋤簾」を作り、「柄杓（ひしゃく）」も無いので、「古い鍋の掴手を切り取り、穴をいくつも開けて「ザル状柄杓」を作り、これに長い柄を取り付けました。水を抜いたり入れたりして鋤簾で突き崩し、柄杓ですくい上げるという作業が続きました。発酵槽の中に人間が入れば仕事は早いのですが、発酵槽の中には硫化水素の元（牛糞）が詰まっており、うかつに入れば死亡事故も起こりかねません。そのため、人が入って作業できる状態にするには、「硫化水素の元」である「牛糞や藁」の成分を薄めつつ、取り出すしかないのです。水を入れたり抜いたり、その間に「突き崩してはすくい取る」を何十回となく行いました。作業中に雷雨となったときもありました。雨の中、いつまでかかるか分からない「牛糞や藁」の汲み取り作業。なぜこんなになるまで気が付かなかったのか。自分へ怒りと、投入した人への怒り、うまく行かないことへのやりきれなさ、帰国日が迫り時間がないことの焦り、…などが重なって、辛いことでした。結局この作業は、帰国日が迫ったため残り3割ほど残し、農場側にバトンタッチすることにしました。予定では、引き続き作業を行い7月25日までに終わることになりました。この経験を通して、改めて「現地の作業や担当者」と日本側の意識の違いを考えざるを得ませんでした。



タイムリミットのある中で、原さんに次々と襲いかかる難問。それでも一つずつ解決策を見出しながら作業をこなして前に進む原さん、竹内さん。まだまだ続く苦闘、そして原さんのプロジェクトへの想い…。次号も必読です！

—— 生物多様性と私達の暮らし ——

今年 10 月に、名古屋で重要な国際会議が開かれる。COP10 と MOP5 という国連レベルの会議だが、多くの市民にとっては馴染みが薄い。一体何のために、なぜ開かれるのか、何がその課題なのかを要約する。

● COP10・MOP5 はなぜ行われるか

COP10 は「第 10 回生物多様性条約締約国会議」、MOP5 は「第 5 回遺伝子組換え生物の取り扱いに関するカルタヘナ議定書締約国会議」の省略である。何のためにこんな会議があるのか？ 話は 1970 年代に遡る。1970 年代といえば、世界の先進諸国がこぞって石油や原発を利用し、高度経済成長に突入した時代である。その結果、世界各地で大気汚染や土壌汚染、海洋汚染などが頻発し、多数の被害者が続出し、世界的な環境問題が噴出した時代でもある。同時に、豊かな生活を目指し、森林資源や海洋資源の乱開発とモノカルチャーが進んだ時代でもある。その結果、地球規模の被害が深刻になり、有名なローマクラブの「成長の限界」が発表されたのも 1972 年である。心ある人々が地球と人類の未来を憂い、このままでは人類の将来が危うくなる、と訴えた。地球環境の悪化の影響は、地球上の 3,000 万種と言われる生物の絶滅速度に顕著に現れた。

1970 年代、年間の絶滅種数は 1,000 種程度と云われたが、現在はその 10 倍、年間 10,000 種以上が地球上から消えている。こうした事実を背景に、1972 年にはストックホルムで「国連人間環境会議」が開かれた。これが全ての始まりである。しかし、こうした懸念が具体的な形になったのは、ようやく 1992 年になって「環境と開発に関する国連会議（通称リオサミット）」が開かれてからである。それを土台に、1993 年に「生物多様性条約」、1994 年には「地球変動枠組み条約（通称、温暖化防止条約）」が提起された。遺伝子組換え作物が初めて商業栽培されたのは 1996 年だが、人間が遺伝子を操作した生物の環境への悪影響を防止するために、特別に「カルタヘナ議定書」として独立に扱うことになったのは、2000 年になってからである。COP10・MOP5 では、これらの条約を具体化し、各国がどう対処すべきかを議論する。COP と MOP の特徴は、各国の政治家に加えて、NGO もそれに参加し意見を言うチャンスが与えられることである。

● COP10・MOP5 の課題

生物多様性保護が人類にとって大切であることに異論をはさむ人はいない。しかし、これが国際条約となると、話は別である。COP10 の大きな課題の一つは「遺伝資源の利用で得られる利益の公正・公平な配分（ABS と呼ばれる）」である。これは何のことか。現在、先進国は制癌剤や糖尿病の薬などを開発し商品化して、世界で莫大な利益をあげているが、元はといえば多くの場合、途上国の先住民などが昔から民間薬として利用してきた動植物の成分を研究し、それから抽出や合成を行い、それを特許にしたものである。途上国の人々はこれを「バイオパイラシー（生物学的海賊行為）」と呼んでいる。特許は 20 年間有効なので、途上国の人々は自らの開発権限を奪われ、高い特許料を払って先進国から買う羽目になり、南北格差はますます広がることになる。これを解消するために、「先進国の獲得した利益を生物資源の原産国にも配分しよう」というのが ABS である。当然、先進国と途上国の利害は対立する。因みにアメリカは、これが国益に反するとして、先進国で唯一生物多様性条約に加盟していない。MOP5 に関して言えば、遺伝子組換え生物が悪影響を及ぼした場合の「責任と修復」が課題である。それは、例えば今、国内では除草剤で死なない「遺伝子組換えナタネ」がナタネ輸入港（名古屋港や四日市港など）周辺で勝手に自生しており、国内の農業や環境を脅かす事態になっている。この責任を誰がとり、どのようにして悪影響を排除するか、が問題である。車などの工業製品では「製造物責任法（PL 法）」があり、欠陥車を販売すれば製造企業の責任が問われるが、遺伝子組換えナタネなどの場合、誰が責任を取るのかさえ決まっていない。NGO はモンサント社などの製造者の責任を明記するよう求めるが、国は曖昧である。アメリカは、MOP にも勿論加盟していない。こうした状況下で、日本政府が如何に条約の具体化を実現しまとめるか、その力量が試されるのが COP10・MOP5 である。（河田）

奨学基金の10年 エウゲーニヤ・ドンチェヴァ



「こんにちは。私、日本の団体の奨学金支援について読みました。その選考に入れていただきたいんです。実家はルギンスク地区のボヴスヌィ村で、汚染地域の第2ゾーンに入っています。父は亡くなっていて、弟のヤロスラフがおり、母は村の学校の教師です。お願いします、奨学金が本当に必要なんです。」

このようにして10年前、「チェルノブイリの人質たち」基金の事務所に、ネーリヤ・アタマンチュクがやってきたのです。彼女は、ジトーミル市薬学専門学校の学生でした。そして、日本の奨学基金から奨学金を受け取ることになりました。今、彼女の人生は、同年輩の若者たちの多くにとって模範となるものです。専門学校を優秀な成績で卒業した後、ウィンニツツァ市の医大に入学し、医大も成功裡に卒業してインターンを終え、薬局で働き始め、同僚から尊敬されるようになりました。そして愛情にも恵まれ、結婚して、今は夫とともに2歳の娘ダーリнкаが話し始めたのを聞いて喜んでます。ネーリヤの母、タチャーナさんは、今も私たちの事務所を訪れては、家族の苦しかった時期に娘への援助をいただいたことを感謝しています。

放射性物質に汚染された村の出身である娘さんのこんな一例が、「チェルノブイリ救援・中部」のアイデアがよい成果を生み、ウクライナの他の団体や基金に手本を示すものであることを証明しています。そして、計105名に上る農業生態学大学・国立大学・医科短期大学の学生たちが、学業の期間中日本の友人の方々から金銭的な支援を受けることができたのです。彼らのその後の運命はさまざまですが、私たちがいつも誇りにしている学生たちもいます。例えば、エレーナとナターリヤのクリヴォイ姉妹です。姉が国立大の社会教育学部で学んでいた間、妹は学校に通いながら、姉が日本の奨学生に選ばれたことを同級生に自慢していました。妹はその後、自分もまた国立大に進学し、私たちの奨学生になりました。今、エレーナは大学院生で、また市民団体「ジェンダー政策のために」の代表でもあり、ナターリヤは卒業した学校の教師をしています。他にも多くの元奨学生たちが、立派に大学を卒業し、それぞれの分野で自らの専門を生かし、人々の助けとなる仕事をしています。

10年にわたる奨学基金の仕事を振り返りつつ、このプロジェクトに対し、私は改めて「チェルノブイリ救援・中部」と支援して下さった皆さま方に感謝申し上げます。

また、とても「豊かな」おじいさんになった滝さんのことも、別個にお話したいと思います。というのも、今や彼にはウクライナの孫たちがたくさんいるからです。奨学生たちは卒業し、結婚して子どもを生み、その子どもたちが日本の滝おじいさんの孫になっているのです。おそらく滝さんも、これほど多くのクリスマス・カードを「孫」たちから受け取られたことは、かつてなかったのではないのでしょうか。また、彼のプレゼ

ントにもお礼申し上げたいと思います。毎回、私たちは子ども達の希望を詳しく聞き、滝おじいさんはそれをそのままかなえようと努力してくださいました。

日本であれウクライナであれ、国の将来は今の若い世代の手中にあります。しかるべき時に、彼らをサポートすることはとても大切です。私たちの奨学生にさしのべていただいた支援の手に対して、日本の皆さんに感謝いたします。

ジトーミル看護大学

「チェルノブイリ救援・中部」運営委員会御中

ジトーミル看護大学当局は、日本のNPO「チェルノブイリ救援・中部」の、チェルノブイリ原発事故の事故処理作業員の子供、また我が州の汚染地域に在住する学生たちへの10年にわたる財政的なご支援に対し、深く感謝申し上げます。

貴団体の奨学生であった学生たちは、2年から4年にわたるジトーミル州の教育施設での学業の間、奨学金を支給され、補助的な財政的支援を受けることができました。

公正さと善意、慈悲の名において、皆様により大きな仕事なされました。

尊敬する日本国民の皆様、遠いウクライナの地で起こったチェルノブイリの悲劇に対し、お応えして下さったことに感謝しております。当大学の43名の学生たちは、皆様のご配慮を身をもって感じることができました。

皆様がいとも、支えの手を必要とするすべての人にそれを差し出してくださいませと願っております。 敬意を込めて

2010年6月21日

学長 V.Y.シャトウイロ

事故処理作業 3 団体の民間(健康保険組合)利用と医薬品支援の評価 2010

【評価内容 (OECD・DAC 評価基準 5 項目による)】

(1) 妥当性 [プロジェクトが現地の開発政策や現地社会事情と合致しているか]

06 年、『救援・中部』は支援現地の民間〔健康保険組合〕ができたことから、この制度を利用し、一般的な医薬品等は保険の適応を受け、制限のある高価な医薬品は『救援・中部』の支援で提供する制度を開始した。寄付金が減少している状況の中、限られた寄付金を有効に生かす支援活動を行なう上で、妥当性があるといえる。

(2) 有効性 [受益者にどのような効果をもたらされたか]

07 年、10 年に実施した個人・団体のアンケートや聞き取り調査の結果をみると、〔保険組合〕は重篤な病気の多い事故処理作業者に必要な高価な医薬品には適用されず、会員・団体は〔保険組合〕への不信と不満を抱いている。

(3) 効率性 [投入した資金などが、効率的に成果を生み出したか]

『救援・中部』の提供した医薬品リストの調査から、会員が受取った医薬品 232 品目のうち 77 品目が〔保険組合〕によって支給され得となっている。医薬品の価格を確認し、『救援・中部』提供か〔保険組合〕の適用かを区別して利用し、さらに〔保険組合〕活用の意味を重ねて説明し、会員の理解を求める必要がある。

(4) インパクト [対象に、どのような正または負の長期的・波及効果をもたらしたか]

『消防士基金』では、07 年には 135 名が〔保険組合〕に加入していたが、今回の調査では全員非加入となった。「元消防士の事故処理作業者は非常事態省医療センターでレントゲンなどの検査が無料で受けられる」ことから〔保険組合〕加入の有効性が低いと判断されている。『障害者基金』では、会員に〔保険組合〕加入は「勧めていない」と「否定的」で、「保険組合の提供する医薬品のリストを拡充すべき」と問題点・改善点を挙げている。

(5) 自立発展性 [プロジェクトが生んだ正の効果が、どれだけ持続するか]

『リクビダートル基金』は、加入は「各人に任せ」、「〔保険組合〕の治療は効果的でない」、「当基金のメンバーが保険組合のサービスを利用するようになるには、治療の質が改善されなければならない」などを訴えていたが、その後、試験的な提案が出される新しい動きもある。

なお最近現地から、〔保険組合〕の負担が大きくなり過ぎるという理由で、現在「1 級障害者は民間保険組合に加入できなくなっている」と伝えられている。

《キリチャンスキー氏のコメント》(カウンターパート『チェルノブイリの人質』基金代表)

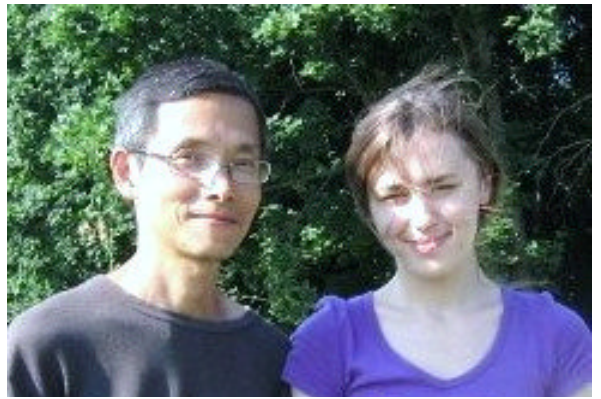
「民間保険組合は、多くの欠陥があるにもかかわらず、有益な点もある。少なくとも、会員が無料で検査を受けられる。年間の会費は、障害者にとってはまとまった金額。毎月 20 グリヴナを支払うことに、すべての障害者が同意できるわけではない。また、組合のサービスに憤慨させられた人もあるかもしれない。組合に対する意見は実にさまざまだ。支援は、もし可能性があるのなら、続けられるべき。国の状況がよくなることが全く期待できない、ということがその理由になる」(概略)

(戸村 京子記)

竹内さんのウクライナ便り

6月から7月にかけて、本紙でも報告のある原さんのナロジチ地区ラスキ村滞在のサポートで、私もひと月近く同村におり、7月16日、帰国する原さんをキエフのボリスポリ空港まで送って行ったのですが、日本のODAで造られている新しい国際ターミナルの建設現場のあたりから、路傍に「この国には検閲があります！」との意見広告ポスターが目立つようになりました。アナウンサーのマイクに、絞首刑の形でひもが巻き付いている写真をあしらったものです。「ああ、例の検閲問題がまだ片付いていないんだな。でもこういう広告が国際空港のそばに堂々と並んでいるということは、まだロシアよりはましなんだろう」と思った次第ですが、自宅に戻ってから週刊誌を読んでみると、前号でご紹介したTV局スタッフの抗議声明の後、賛同するマスコミ関係者らによって「ストップ・検閲！」というキャンペーンが始まったそうで、この意見広告もその活動の一環かと思われます。最大のTV局の一つである「インテル」の所属する「U.A.インターメディアグループ」の代表は国家保安局長ホロシコフスキ氏の妻ですが、1月に行われたラジオ放送周波数の入札に際し、同グループは他のマスメディア企業が落札した周波数に関して訴訟を起し、結果として現政権に対し批判的な2企業の獲得した周波数を奪う、という事態も発生している旨報道がありました。ちなみにホロシコフスキ氏は、某誌によるウクライナ長者番付の14位に入っている人です。

ついでにこの長者番付を見ますと、上位10位内に入っている人たちのうち6人が40代、30代が1人、50代が2人で60代は1人にすぎず、ホロシコフスキ氏は41歳です。要するにソ連崩壊後の混乱期、若くて頭の切り替えが早かった人たちが、素早くうまく立ち回り、手段を選ばずもろもろの資産を手中に収めたものと思われます。番付の1位を占めているのは、一大コンツェルンの代表にして現在の与党である「地域党」所属の国会議員、43歳のアフメートフ氏であり、彼はヨーロッパ規模の長者番



<ラスキ村にて、友人オーリャさんと(2010.07)>

付でも10位内に入る人ですが、マスコミのインタビューに対しては、彼がオーナーであるサッカー・チームのこと以外語りたがらないということでも有名です。

新大統領ヤヌコーヴィチ氏の就任後、「地域党」の率いる連立派閥が国会の多数派となり、前大統領ユシェンコ氏時代のように大統領と首相がいがみあうという事態は解消し、野党も黒海艦隊の駐留期間延長に関する強行採決に派手に対抗した後はしばらく鳴りをひそめ、国のもろもろの経済指標は改善のようを見せているのですが、これは世界的な経済の持ち直しのおかげを受けているというべきで、現政権が特に画期的な経済改革を行ったわけでは今のところありません。一方で上記のように、政権に対する批判の抑圧が進んでおり、国会には「3名以上の参加する路上の示威行動に際しては、4日以前に当該自治体に届出をしなければならない」と定める法案が提出されている由。すでにハリコフ市では、道路建設のための森林伐採に反対する抗議行動が、警察によって解散させられるという事件がありました。ごく最近のインタビューで、作家アンドルホーヴィチ氏は「現在の国会は、国としてのウクライナにとって最も危険な機関の一つと化している。…国会は大統領府の指令を遂行するのみ、つまり国家殲滅の作業の唱道者から遂行者に役割を変えてしまった」と語っていますが、このインタビューでは現政権のロシア語重視傾向に関して、歌手スクリプカ氏の「ウクライナ語をレッド・データ・ブックに載せなければ」との発言も引かれています。(7月23日)

事務局便り

本当にたくさんの方々のお世話になり、事務所移転が終了。やっと落ち着いてきた。…といっても、勝手に「物品」が移動するわけが無く、こまめに整理整頓してくれる人がいるからだ。その人の名は、河田さん。チェル救メンバーズは、労を惜しまぬ働き者ばかりだ。原さん、竹内さんはナロジチで、河田さんは事務所で。河田さんは上手に「あるもの」を有効利用して整理整頓。ボランティアの青年が事務所に来て、河田さんのデスクの脇に収納された「大工道具」をみてうなった。「さすが、河田さん。いつでも、OK っすね」つまり、「直すし、作るし」のスタンス、カッコイiss…だとか。

さて、今夏、事務所は、「冷房」無しで過ごすことになりそうだ。いい風が入ってくる（予定だ）し、プレゼントの団扇がたくさんあるし。しかし、湿気は半端じゃない。

まあ、なんとかなるでしょう～：水と塩を常備…かな。

(山盛)

サンタクロースツアーのお知らせ

毎年、皆さんにお願いしているクリスマスカードキャンペーン。どんな子ども達に渡されるのかな？喜んでくれる顔を見たいな。自分でカードを手渡したい…そんな思いつきで、「クリスマスカードを手渡すツアー（サンタクロースツアー!）」を計画中です。

一緒に出掛けませんか？ 来年1月中頃に出発です。チラシをお送りしますので、事務所にお問い合わせくださいね。是非、ご検討ください。・・・申し込みは、お早目に。 (美)

お宝ネット：発送先および連絡先

〒399-4511

上伊那郡南箕輪村南原 9955-2 原方

「救援・中部 お宝ネット」宛

TEL 0265-73-9355

Fax 0265-73-9352

編集後記

☆暑いっ！ ポレーシェ編集中、どうしてもスイカを食べたくなくて、編集長に無断でスイカを買いに家を抜け出しました。ごめんなさい。ついでにグレープフルーツも買ってしまった。(佳)

☆標高 3,000m の山麓は太陽に近いので日に焼ける。そして涼しい！いいえ…寒い。7月だというのに残雪が残り、足元は雪解けの真っ最中 (!?)。快適な連休でした。そして今、「猛暑！酷暑！」の毎日。日中は我慢します。でも眠る間くらいはそよ風をお願いします… (拝)。(美)

☆猛暑のモスクワ川でウォッカやビールを飲んで泳いでいるって！ ビールが水代わりのウクライナ・ドニプロ川でも似たような状況か！？ 家では、昼になると南側の雨戸を閉じ陽射しを遮断して、暗い中に潜んでいる。けっこう涼しい！ (と)

☆「Yes, we 菅 直人(cannot)！」 ネット上では、ウィットに富むキャッチフレーズが、あっという間に広がる。「普天間基地移転断念」「郵政民営化見直し法案の先送り」「官僚天下り禁止のトーンダウン」、更には唐突に「消費税 10%」を公約するなど、政策が豹変してしまった。米国の圧力（賄賂や恫喝）があったのだろうか？ 韓国の天安哨戒艦沈没事件、メキシコ湾原油流出事件など、あの「911 事件（米政府の自作自演）」が、今また繰り返されている。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473